生誕一〇〇年の展覧会にも多彩な顔

学者志望から経営者、美術館長、研究所長…まだまだ他にも

不屈の挑戦者として有名な「やってみなはれ」の言葉で知られる、サントリー第二代社長の佐治敬三（1919～1999）は、戦後復興から万博を経て大阪が元気だった時代の傑出した経営者である。

大阪帝国大学（現・大阪大学）理学部で有機化学を学び、科学者を志したが、父の鳥井信治郎が創業した壽屋（ことぶきや）に入社し、昭和36（1961）年に代表取締役社長に就任、昭和38（1963）年サントリー株式会社に社名を変更し、ウイスキーブームやワインブームを巻きおこしたり、学術や文化芸術の発展にも多大の貢献をした。

今年は生誕100年にあたり、それを記念した特別展を大阪大学総合学術博物館で開催している（阪急石橋駅下車、12月26日まで、日曜祝日休館）。大阪が生んだ、最も大阪らしい不世出の財界人であり、文化人である佐治敬三の業績を考える、いい機会になる。

展覧会の企画者は、大阪大学適塾記念センターの松永和浩准教授である。専門は室町時代の歴史ながら、以前にも、「日本のウイスキーの父」と呼ばれる竹鶴政孝（1894～1979）が大阪高等工業学校（現・大阪大学工学部）の醸造科に学んだことから酒造の展覧会を企画し、NHKの連続テレビ小説「マッサン」の考証にも加わった。

このスケールの大きな財界人をどうとらえるのかを松永君は苦心し、企画展のタイトルを「大阪が生んだ稀代の経営者 佐治敬三“百面相”」とした。

“百面相”には、どんな顔があるのだろう？ 展覧会は、若き日の「ゴンタ・佐治敬三」からはじまり、浪高生、阪大生、海軍技術仕官としての顔や、啓蒙家、宣伝マン、ブレンダー、挑戦者、騎士、財界人、研究所長、美術館長、音楽ホール館長、文化財団理事長、大旦那としての多彩な佐治の姿を掘り下げていく。

「おおさかKEYわーど」第95回にも紹介したが、大阪の街は、商人、企業家の篤志の精神“フィランソロピー（*Philanthropy*）”で発展してきた。淀屋橋や心斎橋などに名を残す町人が架けた町橋がそうだし、岩本栄之助が寄付した大阪市中央公会堂、住友家寄付の大阪府立中之島図書館もある。

私などは美術館での縁があるし、サントリー文化財団の助成を受けて、「大大阪」の時代を研究させてもらったことも懐かしい。テレビ広告でおなじみの公益社団法人ACジャパンの前身となった関西公共広告機構も、佐治の提唱で設立された。目先の費用対効果や利益だけで動く昨今とは肝っ玉が違っている。佐治はまさしく、大阪人の心意気を多方面で実現した経営者であった。

比較して私には何面相ぐらい顔があるかなどと考えてしまう。三面相ならば国宝阿修羅像みたいだと自慢したくなるが、佐治とは比べられないし少なすぎる。現実にはすべての自分の顔が、他人の顔色をうかがい苦労するさまが、誠に頼りない。

俳句もたしなんだ佐治の句集の題名は『仙翁花（せんのうげ）』という。夏の茶席に用いる「節黒仙翁（ふしぐろせんのう）」という花のことで、「オウサカバナ」ともいうらしい（佐藤一段『関西経済人 ちょっと味な昔噺28集』文藝春秋企画出版部、2016年）。このオウサカは、「知るも知らぬも」の逢坂の関に自生していたことに由来し、「大阪」ではないのだが、洒落っ気ある大阪愛も感じられる。

企画展では、佐治没後、挑戦者魂を受け継いで開発された青色の薔薇「サントリーブルーローズ アプローズ」が展示されているほか、ビールも試飲するワークショップ（要事前申込み）が開催される。ご興味のある方は、大阪大学総合学術博物館のホームページ（http://www.museum.osaka-u.ac.jp/）をぜひ。

「真理探究の日々を過ごす」
中之島の大阪帝国大学理学部で実験を行う佐治敬三。理学部の跡地に市立科学館が建つ。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。